

La guirlande : album mensuel d'art et de littérature (ラ・ギルランド)

Paris : François Bernouard , 1919－1921

Hiler p.403 Colas 1362

ペリオディック（定期刊行物）は服装史研究に欠かせない資料の一部であるが、ことにモード画や挿絵などの視覚的な要素が加わった雑誌では、時には一種の芸術品をみるような喜びを感じさせてくれるものに出合うことがある。そうした雑誌の一つに「ラ・ギルランド：美術と文学の月刊誌」がある。

1919年10月にフランスで創刊され、数年後に11号を最後に廃刊になった雑誌である。最初の3号までは月刊誌であるが、後のほうは1920年から1921年にかけて不定期に刊行されたようである。内容は、小説や詩、評論、風俗とモード関連の記事、それに付録のプレートを加えた60ページ内外の軽い読み物誌であるが、各ページを飾るカラーの挿絵が美しい。当代売れっ子のイラストレーターを動員し、風刺をこめた軽い読み物に小気味よい色づけをほどこした、まさにおとなの絵本とでも言いたいような、贅沢でしゃれた雑誌である。

著名なブルネレスキ（Umberto Brunelleschi 1879－1949）が美術ディレクターとなって毎号小説や詩や評論の挿絵に腕を揮い、これも人気作家のバルビエ（George Barbier 1882－1932）を毎号必ず登場させ、さらには若手のベニート（E. G. Benito）やボノット（L. Bonnotte）、マイアス（R. Mahias）、ポラック（R. Polack）らの作品を随時加え、コミカルな場面にはアマール（J. Hamard）やアルヌー（G. Arnoux）を登場させている。ブルネレスキやバルビエは、モード誌「Journal des dames et des modes」（1912－1914）や「Gazette du bon ton」（1912－1925）などでおなじみの人気作家であり、「ラ・ギルランド」はこの「Gazette du bon ton」とほぼ同じスタイルをとっている。ただ後者はモードやインテリア関係の情報が豊富で実用記事が多いのに比べ、「ラ・ギルランド」では編集者の意図か、あくまで文学や詩を主要記事とする姿勢をとっており、モード関係の記事やプレートはやや精彩を欠いている。

小説は、エルマン（Abel Hermant 1862－1950 アカデミーフランセーズ会員）が創刊号から11号まで「フィリ」（Phili 主人公の愛称）を連載し、しゃれたブルネレスキの挿絵が反響を呼んだのか、単行本としても出版された。また未完に終わったが、ボワレーブ（René Boylesve 1867－1926 アカデミーフランセーズ会員）の「青とかげと四輪馬車」という愉快的短編では、バルビエがすばらしい挿絵を描いている。この雑誌の文芸ディレクターであるエルマノビツ（J. Hermannovits）は、アラビア風に脚色した一連の詩を書いているが、これはブルネレスキの挿絵が見事な効果をあげていて、好評だったせいか3号から最終号まで続けて掲載されている。ブルネレスキ描くアラビア女性と、詩の行間に置かれたスタブ（R. Stab）の彩色アラビア文字は、色彩がみごとで異国情緒豊かである。なお詩では象徴派詩人のフォール（P. Fort）やレニエ（H. Regnier）も登場している。

挿絵の技法はポショワールが主体で、ソーデ（J. Sauté）が彩色をほどこしている。ページをめくるときに挿絵の品の良さとバランスの妙に魅了され、好事家の間で貴重書となっている理由がうな

ずける。付録のプレートは創作画と有名衣装店のモデル画など数枚がつく。創作画はいわゆるモード画ではなく装飾画の部類に入るもので、入念な彩色がほどこされたブルネレスキやバルビエなど人気作家の作品が多いが、変わったところでは、日本女性を描くブランシュ (E. Blanche)、児童画のレイ (J. Ray)、エキゾチックな雰囲気的女性像を描くドメルグ (Domergue) やズィノビュ (Zinoviev)、線描きのカドガン (Cadogan) らがいる。有名衣装店のモデル画では、テーラーの店 Barclay の紳士服をタクワ (M. Taquoy) やポノットが描いており、婦人物では、Jenny、Marie-Luise Barclay、Melnotte-Simonin、Maison Ain などポピュラーな店の衣装を、ブルネレスキやバルビエ、ポラックらが描いている。

ページ数は少ないがモードに関する記事は毎号掲載されており、前半の号ではランクレ (J. Lancret) が、後半の号ではミルクール (M^{me} de Mirecourt) が、有名衣装店の傾向や流行品、女優の舞台衣装や着飾ったパリジェンヌが集まる街などを紹介している。また「エレガンスの移り変わり」や「服装に関する考察」あるいは「パリジェンヌの人相学」「音楽とジャズによせて」などのタイトルで書かれた風刺の利いた評論や風俗論からは、大戦後の開放感と1920年代初期のムードが伝わってくる。しかしモード関連の記事は付随的に扱われ、あくまで文芸雑誌という姿勢が貫かれている。

「ヴォーグ」や「ラ・モード」など本格的なモード誌にはすでに網目写真版が登場し大量印刷の時代に入っていたが、かつての手づくり本の良さを求めて1920年代前後にポショワールを主体とした雑誌がいくつか出版された。「ラ・ギルランド」もそのなかの一つであるが、一般向けというよりは趣味性の強い雑誌であり、短期間で廃刊になった理由もその辺にあったと思われる。(辻 ますみ)

『文化女子大学図書館所蔵 続西洋服飾関係欧文文献解題・目録』より修正して転載



1920年 Quelque mystère de la mode (モードの謎) から。バルビエ画